

本書の主要目次

- 第1章 中華民国の台湾化と中国（中華民国史から見た中華民国の台湾化；民族から見た中華民国の台湾化ほか）
- 第2章 李登輝による中華民国の台湾化（大陸政策；民主化ほか）
- 第3章 馬英九政権の対中政策—ECFAと兩岸サービス貿易協定を中心に（地域経済統合の台頭と台湾の現状；ECFA締結の要因とその問題点ほか）
- 第4章 自民党「親台派」から見た「日台関係」—「日華」から「日台」へ（中華民国対日外交と日本の親華組織；岸信介政権の対華外交ほか）
- 第5章 六大都市選挙に見る「中華民国の台湾化」（六大都市と九合一選挙；九四年の三大首長選挙ほか）



中華民国の台湾化と中国
—台湾は中国なのか？

浅野 和生編著

展転社
1,728円（税込み）

複雑怪奇な台湾の素顔を徹底解剖

評者

丹羽 文生

拓殖大学海外事情研究所
准教授

世間一般には「台湾」で通っているものの、そこに住む人々のパスポートには「中華民国」と書かれている。事実上の駐日大使館は「台北駐日経済文化代表処」で、オリンピックを始めとする国際的なスポーツの祭典では「チヤイニーズ・タイペイ」と呼ばれ、いずれも「台北・タイペイ」という都市名が入っている。何とも複雑怪奇で理解し難い。

オランダ、スペイン、続いて鄭成功一族、清朝、そして日本、戦後は国共内戦で敗れて中国大陸から逃げ込んできた蔣介石勢…。四〇〇年以上に及ぶ台湾の歴史というのは、一言で言えば外来政権よる支配の歴史である。

李登輝政権の下で自由化、民主化が実現し、その後、陳水扁政権の時に初めて「台湾」名による国連加盟を申請して、加速度的に台湾化が進んだ。だが、蔣介石が移植した「中華民国」という鎧を脱ぎ捨てるまでには至らなかった。

さらに、一九七一年十月の「中華民国」の国連追放以降、国際社会では「中国」を代表するのは「中華人民共和国」であるとされ、日本も一九七二年九月に「中華人民共和国」と外交関係を結んだのと同時に断交した。その結果、まるで台湾が「中華人民共和国」の一部であるかのような虚構が罷り通

っている。

こうした歴史的バックグラウンド、併せて編著者が指摘しているように「今日の中華民国は、ほとんど台湾化している」という側面とともに、いまでも中国であるという側面を併存させている」という点が、多くの日本人が台湾の本当の姿を理解できない最大の理由であると言える。それを分かり易く紐解いたのが本書である。

本書は、全部で五つの章で構成されている。第一章では「中華民国の台湾化」を多角度から描き、第二章では李登輝が試みた「中華民国の台湾化」を検証し、第三章では馬英九政権発足後の中台関係、第四章では日本での「中華民国」と「台湾」の扱いの変化過程、第五章では中台関係に大きなインパクトを与えた昨秋の統一地方選について論じている。いずれも「中華民国の台湾化」という現象を多面的に分析している。

編著者は、日本における台湾研究の泰斗であり、国際政治学の碩学である。筆者は「台湾オタク」の一人として、これまで編著者が書いた日台関係に関する著作には、ほとんど目を通してきた。今回の著作も実に面白い。どちらかと言えば玄人向きではあるが、複数の顔を併せ持つ台湾を知る上で極めて有益な一冊である。

日本人が知らない集団的自衛権

小川和久著

マスコミでお馴染みの軍事評論家が集団的自衛権について豊富な情報量で素



文春新書
810円（税込み）

人にも分かりやすく解説をする新書である。例えば、集団的自衛権行使により自衛隊が戦争を開始するのではという懸念に対しては、自衛隊が対潜水艦戦と掃海能力には優れているものの、その他の装備には乏しく、単独での軍事活動は不可能と説く。その他、米国にとっての日米安保の意味、集団的自衛権と集団安全保障の違いなど基本的な知識を提供してくれる。

イスラーム国の衝撃

池内 恵著



文春新書
842円（税込み）

本屋には、「イスラーム国」を議論する書籍が山積みとなっている。内容も多種多様、質も玉石混交である。そうした中で、この本は新書ながらまとまりが良く分かりやすい。「イスラーム国」の思想、「イスラーム国」の成立と発展、「イスラーム国」の将来が、①政治思想、②中東における地域政治の状況、③世界政治の影響の点から、歴史的に丁寧に辿っている。将来の展望についても、歴史的分脈に位置づけて明らかにしている。説得的である。

ハニガニツラッシュ